

## 第十章 政界への道

大平がいつ政界を志すようになったかは、はっきりしない。しかし、当時の中堅官僚にとって、政界がどういうものであったか、ここで簡単に、その頃の政界の状況を見ておくことにしよう。

すでに見たように、吉田茂は、昭和二十四年一月の総選挙で、自分の藩屏とするため多数の官僚を政界に登場させたが、官僚の方でも政界に魅力を感じる条件はととのつていた。まず、何よりも、憲法改正、民主化により国会は「国権の最高機関」となり、その地位は、飛躍的に高められた。その上、追放によって、軍人、華族はもとより、ほとんどの既成政治家が衆参両院の舞台から締め出されており、新たな日本の設計図を引く仕事が多く、新人政治家たちに任されていた。また、インフレが昂進し、高級官僚の収入が相対的に下落した状況の中にあつては、官僚生活を全うしたからといって、優雅な退職生活が待っているとは思われなかった。さらに、昭和二十四年以降は、日本が戦後の虚脱状態を脱し、復興の努力が軌道に乗りはじめ、米国の対日占領政策も、冷戦の激化に伴う政策転換が行われて、日本の経済的復興を支援する空気が高まりつつあつた。それは、官僚テクノクラート出身者が縦横に腕をふるうことのできる場が開けることを意味していた。大平は、すでに蔵相秘書官として政界や政治家について多くのことを知りうる立場を経験していた。また政治家に転身した官僚たちの活躍を目のあたりにしていた。その最も典型的な身近な実例が池田勇人であつた。一年先輩の黒金泰美が池田の驥尾に付して政界出馬を志していることも、大平にとっての刺激となつていたであらう。

とはいえ、大平は決して官僚生活に飽きがきていたわけではない。前出の塩口の『聞書』によれば、大平は「安本の公共事業課長というものに興味も誇りも未練もありましてね……」と語っていた。とすれば、大平が池田蔵相秘書官を命ぜられたとき、「まんじりとも出来」ぬ夜を明かし、「ココロチニミダレテ」と電報を打ったとき、すでに今回の秘書官としてのその先に自分を待っているものが何であるかを予感していたのではないだろうか。だが、そのことについては、彼自身は何も語っていない。ただ、われわれは、彼が、九州で遊んだ最後の地が別府であること、「人目にたたないようにコツソリ帰京」したと述べることに、この二つの点に注目したい。別府から故郷の香川へは船で至近の距離である。それは、<sup>（おとけい）</sup> 齡三十九歳にして人生の大きな岐路に立たされた男が、とりあえず立ち寄りた場所ではなかつたろうか。さらに、またこの時の選挙での香川二区の当選者は次のとおりであったことに着目したい。

福田繁芳 民主前 三四、八三一票

島田末信 民主新 三三、二九五票

田万広文 社会元 三三、四〇九票

すなわち、ここには民主自由党の当選者は見当らない。次点は国民協同党で、民主自由党の候補者は共産党のそれよりも下位だったのである。

池田新蔵相の初仕事は、彼の就任前に来日してイジョセフ・M・ドッジ公使とともに、日本経済再建の礎を築くことであった。占領軍総司令部が昭和二十三年十二月に発表した「経済安定九原則」にもとづいて、通貨の安定と予算の均衡を実現しようというのである。池田は、のちに秘書官や大蔵官僚の協力を得て刊行した『均衡財政』（昭和二十七年八月刊）という書物の中にこの当時の思い出を次のように記している。

「ドッジはまず、財政の規模を縮小して収支を合わせねばならぬと考えていた。この点は私も同感で、それには価格差補給金に鉅を振うしか方法がない、ということでも一致した。元来、自由党は過ぐる選挙に、煩わしい統制の緩和を行い、

企業の自主性を尊重し、国民の税負担を減らす、というスローガンを掲げた。政府が補給金を出していたのでは、当然企業の内部に干渉しなければならないし、また、その金額も二千億円以上とあっては、全体の予算の三分の一にも当たり、これでは減税など思いもよらない。だからこれを切ることは一石二鳥の策だった。だが、それでは企業の採算が外れ、生産は減り、補給金を外した分だけ物価が高騰するから、国民生活はこれまで以上に苦しくなって国内は大混乱する、というのが、当時のいわゆる学者達の議論であった。また司令部でも、ニュー・デイルの系統を受けた若い理論家達が多かったので、ドッジと私との一致した結論には内外に猛烈な反対があった……。」

もっともドッジと池田が、占領軍と国会の反対を押し切ってつくった昭和二十四年度予算案は価格差補給金の打切りに加えて、復興金融債の発行停止と巨額の一般会計からの償還（九百十五億円）をも含むものであったため、財政の均衡のために、大幅な増額が必要とされた。「国税、地方税、専売益金を含めて国民一人当たりの税負担は、前年度の六、一四〇円から九、九四二円へと、約五割の増加を来し、租税総額は、国民所得二兆九、四〇〇億円の二六・七％に達した。これが『超均衡予算』の実体であった。」（『昭和大蔵省外史』）

予算案通過の数日後、ワシントン発UPは為替レートドル「三百六十円の決定を伝えた。昭和二十四年四月二十五日から実施されたこの為替レートは、昭和四十六年十二月まで二十年余にわたって変動することなく、日本経済の発展を支えた。ドッジの処方した『超均衡予算』という劇薬は、その後、各方面にさまざまな副作用をまき起こしはしたが、インフレという熱病を克服して、患者の生命をみごとに立ち直らせることができた。

大平は、このような予算案通過後、一カ月余で、蔵相秘書官を命ぜられた。「大臣室には、金融難と重税に対する苦情が相次いで殺到した。

……殺到する苦情に対する私の対応方法の第一は、陳情者の立場になって、その主張に共感を寄せつつ、池田さんのやり口の足らざるところを責める側に廻ることであった。しかし同時に、池田さんが決して冷酷な人ではないことを、説明

することも忘れないように心がけた。ちなみに池田さんは、気は優しく、思いやりもある人ではあるが、その容ぼうやマナーから思わざる誤解を受けたり、反感を招く人であった。そういった消息を陳情者にていねいに訴えて、理解を求めたのであった。

第二の方法は、税務署に対する注意であった。トッジ・ラインは事実、空前の重税を国民に強いるものであった。自然、税務署の事務には渋滞が起こり、過誤も多かった。徴税令書を同一人に再交付するような不始末も随所に起こった。私は苦情に接することに、所轄の税務署長に電話して早急に納税者にお詫びをさせたり、過誤の訂正を求めることとした。

第三の対応は、銀行に対するものであった。融資希望者に対する融資の可否、条件、金額の決定は、もとより銀行自身の分別と責任で行われるものである。極度の金融梗塞<sup>エツボク</sup>下での融資希望者の苦情に、理解もし同情もするが、そのために銀行に圧力を加えることは、すべきものでもなく、またできるものでもない。私のできることは、せいぜいどっぴり金融機関を選び、どっぴりお願いをすればよいかという、いわば一種の金融相談にのるのが精いっぱいのことであった。「私履歴書」

その頃の大平秘書官を知るもの話を総合すれば、彼の仕事ぶりは、かなり悠揚迫らざるところがあつたらしい。池田満枝夫人は、「(大平さんは)宅にはさっぱりお出でにならず、池田が『お前から朝は必ずくるように言えよ』と申ししたこともあります」と語っている。

また池田の秘書だつた登坂重次郎(のち衆議院議員)によれば、「大平さんはよく、『俺は細かいことは知らないから、それは大臣に聞け、俺は大雑把なことをやるんだ』と言つていた。秘書官室にも朝一度顔を見せるだけで、あとは適当に外を歩いているようだつた。大平さんの得意とするところは、池田さんと大蔵省、池田さんと政界、池田さんと財界などの間を調整することで、池田さんは信頼すると命をあずけてしまつ方だつたから、大平さんは池田さんの代理としてのびと楽しんでやつていた」ということになる。

こうした調整活動の舞台の一つが、築地にあった「栄家」という旅館である。大平はのちに、『春風秋雨』（昭和四十一年十月発行）に「栄家と交友群像」と題する一編をのせているが、それによると、この旅館の女将「お栄さん」（和田栄子、故人）が広島出身であるところから池田がこれをひいきにし、多くの集りがここでもたれた。

「賀屋興宣、池田勇人といった政界の大御所をはじめ、灘尾弘吉、三好重夫、宮沢喜一といった人々も、揃って広島出身であり、従ってこれらの人々に繋る多くの政界人が、ここに入入りするようになった。私も池田さんを通して、前尾繁三郎、黒金泰美両氏とともにしげく出入りするようになった……」。

この文章には、右のほか、財界、官界、政界の数十人にわたる人々の名があげられている。『回想録』追想編をひもいても、築地の栄家で大平に会った思い出を記している人は少なくない。大平にとって、栄家はその人脈づくりの重要な場でもあったのである。

大平は生前「オトウチャン」という愛称で呼ばれていたが、村山達雄や登坂重次郎は、この栄家の女将がその名付親ではなかったかと推測している。その風貌と悠揚迫らざる態度が、女主人をしてそのように命名させたのである。

秘書官になってからの大平の仕事は、先にも述べたようにもっぱら外まわりだった。日程などの細かいことは後輩の宮沢喜一や稲田耕作がやってくれる。大平は、肝腎かなめのところさえ押さえていればよかった。だが、何が肝腎なことなのかを知るのは、それほど容易ではなかった。ましてや、池田自身がまだ政界の新参者で、政界の事情には必ずしも十分に通じてはいなかった。その池田のために正しい判断をするには、場合によっては、池田本人よりかなり深いところで、政界、財界、官界を動かしている力に接し、その動向を的確につかみとらなければならなかったであろう。いずれにせよ、彼は否応なく政治的に考え、政治的に動かざるをえなくなって行った。

大平自身は、初当選の翌年に、自分が政界に出た動機について書き、二つの要因をあげている。

その一つは、前記のような秘書官稼業をやっているうちに、（大蔵省）事務官の仕事が肌に合わないような気がしてきたということである。「秘書官という政務官の仕事から正常事務官の仕事にかえって行ったとしても、事務官は事務官として

何とかその中によさを見出してやって行けるに違いない。それも考え直して見たが、私の場合は素直に事務に帰って行く気がしなかった。それというのも男として何か自分の活力を十分に生かすような破天荒の冒険がしてみたかった。現状に対する倦怠感を打破して、自分の生命を思う存分燃焼させてみたかった。」(『財政つれづれ草』)

もう一つの素因は、官僚の将来についての展望である。「元来行政官というものは上りが早いものである。どんなに永く勤めてみても五十歳で行政官をやるといふ事は、日本においては稀有の例である。どうせ中途半端で再び娑婆に投げ出されるに違いない。しかし時勢はきびしく、天下りは許されそうもない。では、実業はどうか。どうにも自信が持てない。「省議に参列する大蔵省の次官や局部長連中の顔をつくづく眺めてみても、今この人達が官職を離れて裸で銀座の街頭に抛り出されたとしたら、果してこの中の何人が自らの力でその生活の道を開拓して行けるだろうか。」文筆業は到底歯が立つ仕事ではなく、「といて、僅かの恩給を頼りに隠棲する程の世捨人になるにはまだ血の気があり過ぎる」(同前)というわけである。

この二つの素因から、大平は政界出馬を真剣に考えはじめた。

「然らば政界に出るといふことはどうであろう。それも一つの道には違いない。それにしても第一、政治という仕事ほど激しくけわしい仕事はない。それはきびしい日常の闘争を意味する。細い綱の上を渡るような仕事である。薄氷を踏むような芸当である。ほめられるよりは悪口をいわれることが多い。家庭を犠牲にする覚悟がなければならない、悪口を叩かれ頭を万人に下げながら渡世することは決して算盤に合う仕事ではない。それに選挙という困難で金のかかる闘争を、しょっちゅうくぐらなければならぬことは、何としてもおっくうなことである。……自分の性格を分析してみても在来の政党政治家のようなコースを踏む自信があるかどうかと反省してみるが、どうも確たる自信がもてそうもなかった。

とは言うものの、政治という職業は人間社会における最も本源的なものである。人間は政治的動物だと言われている。凡てのことの始めに政治があり、凡ての社会的営為を貫いて政治があるのである。従って又政治家という公職はなければならぬし、誰かがこれをお引受けしてやって行かなければならぬ。……そこでふりかえって一体在来の政治家と自分

とを較べてみて、自分が果して彼等と同等或はそれ以上の仕事が出来て行けるかどうかを考えてみると、手前味噌かもしれないが、その位のことばやってやれないという訳のものではないというほのかな自負心が湧かないこともなかった。」  
 (同前)

不安と自負の交錯する日々がつづいた。

「彼は考え廻らしている間に、月日は遠慮なく経過して行って、何とか決断をつけねばならない破目に追いこまれて行った。」(同前)

この時期、政界出馬に関する大平の複雑な心理の動きをうかがわせる、いくつかの証言を聞いてみよう。

池田満枝夫人はこう言う。「ある日、久々に顔を出された大平さんが、いきなり茶の間と廊下の境の鴨居にぶら下がって、真面目な表情で、『僕もいよいよ不惑の年になりましたよ。不惑になったら感づてはいけなと思いますよ、いよいよ感づことになるんじゃないですかなあ』とおっしゃいました。」(『回想録』追想編)

大平が不惑の年(四十歳)を迎えたのは、秘書官就任の翌年(昭和二十五年)三月十二日である。

さらに同じ池田夫人は、「池田が肩入れをした広島知事選挙が負けいくさになった時、帰りの汽車の中で、大平さんは『政治家ってつくづくいやですな。いっそ、実業家に転身して、じゃんじゃん金もつけしてみたい。そしたら、ぼくは池田さんにじゃんじゃん献金してあげますよ』と言いました」と語っている。これは、大平が不惑を迎えたさらに一年後の昭和二十六年四月に、戦後第二回目の統一地方選挙が行われた時のことである。

また、この年の夏、池田の秘書だった登坂重次郎は、次のようなことがあったことを記憶している。

「池田大蔵大臣時代、池田、大平、宮沢、私の四人が柳橋の『稲垣』で飲んで、それから隅田川に舟を浮かべたことがあった。その時、大平さんは突然、『大臣、俺もひとつ政治家になってみようと思うがどうだろう』と言いだした。『それはいいじゃないか、君なら政治家にはびつたりりの性格だ。ところで、金はいくらぐらいつくれるかね』。大平さんがこのぐ

らい、と答えると、池田さんは、「じゃあ、あとは俺が面倒をみてやるさ」と答えた」。

話を戻すと、昭和二十四年の秋（十一月一日）、アメリカの國務省当局筋が対日講和条約について検討中と声明したことをきっかけに、講和の方式に関する議論がいつせいに活発化した。単独（多数）講和か全面講和かというのである。絶対平和主義をとなえるいわゆる「進歩分子」は全交戦国との全面講和をとなえたが、吉田首相は、同年十一月十一日に参議院で、単独講和でも全面講和に導く一つの途であるならば喜んで応ずると答弁した。そして翌二十五年二月、彼はマッカーサー元帥と会談し、しかるべき関係者を渡米させ、講和問題についてアメリカ政府の意向を打診したいと申し出、内内の諒解をとりつけた。

ここでまた吉田の秘蔵っ子の池田が起用されることになる。池田は、吉田の密命を帯び、閣僚として戦後はじめて、表むきは「アメリカ合衆国の財政経済事情視察のため」という名目で、四月二十五日に渡米することが決まった。

池田の訪米の旅はきわめて質素なもので、随行は英語の達者な宮沢秘書官一人だったが、講和に関する吉田の意志をドッジを通じて米國務省に伝え、また経済問題についても、厳しいドッジ・ラインをかなり緩和するという約束をとりつけることができた。

この訪米の結果、アメリカ政府は、対日早期講和実現のため、六月二十一日、ジョン・F・ダレスを日本に派遣したが、同月二十五日、突如、朝鮮に戦火が噴きあがった。思いもかけぬ動乱で、講和は翌年に持ち越されることとなるが、一方この戦争は、ドッジ・ラインの強行で氣息奄々としていた日本経済にカンフル注射の役目をはたす結果となった。滞貨は一掃され、あらゆる工場が一斉に稼働をはじめた。俗に「朝鮮ブーム」と言われた特需景気である。

この朝鮮戦争でおくれた講和会議を間近にひかえる昭和二十六年夏、池田は突然、大平に、米国視察の旅に出るよう任命じる。

「昭和二十六年八月、私は池田大蔵大臣の配慮で三カ月程米国に出張することになった。池田さんとしては、自分の身辺に私がないことによる不便を忍んで、極力私に外遊を勧めてくれ、自らその手配をとってくれた。唯彼は私にどうして



外遊させようとするのかつまりその目的については一向に明かさなかった。『講和会議もありがたい機会だから行っておいで』といわれただけである。『何時立つのですか』と聞きただせば『これから一週間もすれば立ってはどうか』と言われた。そこで私は急いで旅装を整えて、八月十三日羽田空港を立って渡米したのである。十月下旬に帰国してみたら、当の池田さんは、『もうこれから大蔵省の方の仕事は心配しないでよいから、出来るだけ郷里に帰って、郷里の人々と顔馴染になるんだ。何時衆議院は解散になるか判らんよ』と念を押された。そこで私は、始めて池田さんが私を渡米させた真意をよみとることができた。当初池田さんは『君は政治家になってはいけない。君のような型の人物は官界に乏しいのだから、自分としては君が大蔵省に残ってくれることを希望する。絶対に政界進出など考えてはいけない』とよく言いふめられていた。私は彼のこの豹変に驚いた。『『財政つれづれ草』』

右の文章によれば、池田が大平に政界進出をすすめたのは、明らかに、大平帰国後の十月下旬である。大平が池田に政界出馬を表明したのがこの昭和二十六年の夏のことだったというさきの登坂の記憶とのこの食い違いを、どう理解すべきか。後年の『私の履歴書』には、簡単に「池田蔵相が、わざわざ秘書官の私をこのグループに参加させることにしたのは、私を次の選挙に出馬させたいが、そのためにも一度アメリカを見せておきたい、という配慮があったようである」と記されている。

大平の渡米は、アメリカ陸軍省所管の「ナショナル・リーダーズ・プログラム」によるものであった。「それは占領地域の国会議員、学者、役人等を一定期間（私の場合は九十日間）アメリカに迎えて、特定のテーマについて、見学、調査、研修等を行うものであった。」（『私の履歴書』）

大平は、参議院議員の高瀬荘太郎、衆議院議員の前田正男らとともに八月十三日に羽田を出発、ウエーク島、ハワイを経て、八月十四日（現地時間）サンフランシスコに到着した。翌日同地を発って汽車で米大陸を横断、十九日ワシントンに着き、九月二十六日まで約四十日間同地に滞在し、以降、バルチモア、ウォシントン、フィラデルフィアを経て、九月二十

八日ニューヨーク着。その後、予定を繰り上げてサンフランシスコ経由で十月二十一日帰朝した。全行程七十日間である。渡米の任務は、一応、研究開発事業の予算面を調べるということになっており、官民各界の指導者を訪れて科学技術の振興対策を調査する一方、各地の大学、工場、研究所、試験場等を見学した。むろん、大平としてははじめてのアメリカであり、戦後の日本人としても早い時期の訪米であったから、目や耳に入るものすべてが新鮮であった。

その旅行記は、『四国新聞』に九月八日付から十月二十六日付まで数日ごとに、「アメリカを行く」と題されて十七回にわたり連載された。その内容の詳細は、『回想録』資料編によって見ていただきたい。ここでは、その連載十三回目の末尾に、次のように記されていることに注目しておこう。

「……こうしてワシントンの滞在が意外にのびたが、東京から一カ月繰り上げて帰朝するよつにこの要請もあるので、九月廿六日当地（ワシントン）を立て、……廿八日夜ニューヨークに出る予定を樹てた。ニューヨークで一週間滞在してから、私は日本人のあまり行ったことのない南部地方を歩いて十月中旬には西海岸に出たいと思っている。至るところでまた通信をお送りしたい。」

そして十七回目の最後の通信には、「ニューヨークについてから最早一週間の日が経ち、明晩はモンゴメリーに向けて出発しなければならなくなった……」とある。モンゴメリーは、アメリカ南部中央のアラバマ州の州都であるが、残念なことに通信はこれで絶えてしまったので、大平が南部のどの地域を巡歴したが、そしてどのような感想を抱いたかは知るこゝとができない。十八回目の通信として予定された原稿は残存しているが、それによつても、彼が「十月十五日早朝、六十三日目に漸く振出しのサンフランシスコに辿りついたことがわかるにすぎない。」

またこの原稿には、アメリカ紀行のしめくりともいふべき全般的な印象が述べられており、当時の大平のアメリカ観と国際情勢の認識をうかがうに足る重要な記述と思われるので、ここにその一部を引用しよう。

「……今日のアメリカに栄えている文化は、今迄のわれわれの文化史的方法論ではおし計ることがむづかしい何か異質の文化であるようです。それは天国と地上をつなぎ、無限と有限の架橋を具体的に志す実証的文化であります。」

……又それは見方を変えれば、勤労と節約の文化といえましょう。如何に豊饒な国土が眼前に展開されたとしても、僅か二百年の間にこれだけの蓄積をやつてのけ、これだけの国力を養つたということはどう見ても平凡なことではなかつたと思ひます。

……次にそれは動いてやまない、停滞を知らない動的文化であります。競争という動力によつて殆んど自動機械のように豊饒の只中を、勤労と節約という一連の実践が自発自転しつゝ無限の行路を走つていようようにさえ思われまふ。……かくて今日のアメリカは、史上にかつて類例をみない巨大な怪物のような相貌をもつて、膨大なる生産力を限りなく發揮しつゝあります。

……私は全通信を通じて、アメリカを賞讃しすぎたかもしれませぬ。しかし感じ易い客心に映つたアメリカの姿はざつとそのようなものであつたわけです。それは明るい多彩な色彩にいろどられた大巻でありました。今私は静かにその大巻の頁を閉じようとしています。(十月十六日、サンフランシスコにて)「

この大平の渡米中に、サンフランシスコ講和会議が開催(九月四〜八日)され、日本は対日平和条約によつて、国際社会への復帰を許されることになつた。「吉田茂首席全権以下、日本の全権団の写真と会議の様子が、連日のようにアメリカの日報紙の紙面を飾つていた。私はそれらの記事を読みながら、日本の独立回復の日が近づきつつあることを思い、胸躍らせたものである。」「私の履歴書」因みに大平が寄稿した『四国新聞』十七回の連載記事は、大平の名前を知らなかつた香川の有権者への大きなPRとなつたであらうこともつけ加えておきたい。

ところで朝鮮戦争は前年(昭和二十五年)秋に、中国義勇軍が戦線に投入されたため泥沼化し、マッカーサー元帥は中国軍の基地東北地方(旧満州)の爆撃許可を要請したが、米政府はこれを容れずに、四月同元帥を解任、後任となつたりツジウエー中将は就任後間もなく対日講和をめざして、占領中の諸法令や諸制度の改廃、追放令の解除等の再検討を許した。六月二十九日と七月二日に発表された第一次追放解除者は、六万九千名にのぼつたが、その中には多数の戦前政治家

が含まれていた。この追放解除組の中でも旧自由党系の三木武吉、石橋湛山らは、講和条約の批准後、鳩山一郎を擁して吉田から政権を譲られることを期していたが、追放解除の十日ほど前、鳩山は脳溢血で倒れた。しかし、それでも鳩山派は結束を固めて、政局の転換をはかろうとしていた。

朝鮮戦争の方は、北朝鮮、中国軍が国連の停戦交渉申入れを受諾し、七月十日には休戦会談が開始されたため、戦火はまだ消えなかったが、ようやく先が見えてきた。それとともに、対日講和交渉は急速に進展して、さきに記したように、九月八日には講和条約が調印された。しかし国内ではこの講和およびそれと同時に締結された日米安全保障条約に対する態度をめぐって、社会党の左右両派が対立し、大平の帰国三日後（十月二十四日）の社会党臨時大会で、同党は、右派社会党（書記長浅沼稻次郎、講和条約のみに賛成）と左派社会党（委員長鈴木茂三郎、両条約に反対）に分裂した。共産党は、もちろん両条約に反対であった。十月二十六日の衆議院本会議の票決にさいして、国民民主党の一部からも反対投票が行われたが、本会議は講和条約を三百七対四十七、安保条約を二百八十九対七十一の圧倒的多数で可決した。

この講和条約成立を機に、政局は新しい方向をめざしてその流れを変えるかに見えた。大平が（おそらく池田から）予定よりも一カ月早い帰朝を求められたのは、そのためであろう。

だが、吉田は、講和条約発効（二十七年四月二十八日）に伴う体制整備をも自らの手で行うことを意図し、ひきつづき政権維持の決意を固めた。その具体的なあらわれが、十二月二十五日の「クリスマス改造」であった。改造人事の中心は、治安防衛関係の強化にあり、木村篤太郎元司法相が法務総裁に就任した。岡崎勝男は官房長官から専任外相予定の国務相となり、新官房長官には吉田がかねてから期待をかけていた保利茂が起用された。こうして、昭和二十六年は暮れる。

明けて昭和二十七年二月には、吉田自由党内閣からの政権ひきつぎをねらい、国民民主党と、松村謙三ら旧民政党系の追放解除者と、農民協同党とが合体して、改進黨が誕生した（幹事長三木武夫、六月には追放解除の重光葵が総裁に選ばれた）。

政局は解散がらみではあったが、吉田首相は任期いっぱい（昭和二十八年一月二十二日）まで解散は行わぬとして、毛

ほどもそのそぶりを見せない。講和と独立に伴う案件が山積していて、前年十二月十日に召集された国会は会期延長五回を重ね、合計実に二百三十五日間に及んだ。吉田が力を入れた法律には、占領中の団体等規制令廃止に伴う破壊活動防止法（略称『破防法』）ならびに保安庁法がある。後者は昭和二十五年、朝鮮戦争が勃発するや、マッカーサー元帥の要請で創設された警察予備隊を、日米安保条約の成立に対応して保安隊へ編成替えしようとするものであった。

当然ながら、これは革新勢力の反発を招き、国会はしばしば混乱すると同時に、国会外のデモ行動も激化して、メーデー事件、火炎ビン事件、吹田事件等が発生した。共産党は敗戦後しばらくの間、占領軍を『解放軍』と規定し、民主革命から社会主義革命への平和的移行を夢みていたが、冷戦の激化の中で、コミンテルンからその平和主義を批判され、中国革命の成功、朝鮮戦争の勃発、講和『日米安保体制の出現等に刺激されて武装蜂起に立ち上がりうとしていたのである。他方、国民の大多数は、不安を抱きながらも、しかしそれゆえに大勢としては日米安保体制を支持していた。だが長期にわたる吉田政権の継続に対しては、ようやくこれを倦む空気が強まりつつあった。

大平は、その頃の心境を次のように語っている。

「いよいよ政界出馬を決心したものの、一向に解散になる気配はない。吉田首相は講和締結に伴う跡始末までこの際一氣にやっつてのける決意でいたようだ。といって政治は水物、何時解散になるか判らない。近いようでもあり遠いようでもある。このように半殺しのまま置かれるというのはわれわれにとって決して楽なものではない。早く解散があつて欲しいという私の心理は、入隊した兵隊がなるべく早く戦地に行つて実戦に参加してみたいという心理と一抔似通うものがあった。池田さんは私になるべく田舎に帰るようになつて勤めてはくれたが、田舎に帰るといつてもそう無闇に帰れるものではない。東京でやり遂げなければならぬ仕事がある。それに田舎に帰つて一週間行脚したとすれば、その間に依頼された諸々の仕事に一応の結末をつけるためには少くとも一月月がかかる。又帰省に際してはどうしても多少の経費がかかる。こういふことを一カ月もやらねばならぬとしたり、それは大変なことであると思つた。」（『財政つれづれ草』）

また、より後年に書かれた『私の履歴書』は、その間の事情をこう要約している。

「やがてアメリカから帰国した私は、次の総選挙を目指して事前運動に入った。文字通り、『金帛火来』の選挙区詣でを繰り返すことになった。各市町村には、私と血縁、地縁に結ばれた人々、私と学校や職場を共通にする人々を中心に、後援会が次々と結成されていった。私の場合は、大蔵省に奉職していたので、酒や塩の製造、販売に関係される人々や、葉たばこの生産者が、まず私の陣営に参加してくれた……。

私は今でも演説が上手とはいえないが、そのころは全く未熟で、事実、砂をかむようなものであった。そのため私の陣営では、選挙の成り行きを心配していた。ところが世の中は面白いもので、思わざるところに知己がいるものである。『ともかく、あなたの笑顔がかわいいからお札（票のこと）を入れてあげる』という婦人達が出てきたり、道路ですれ違う馬車引きのおじさんからは、所も名前もいわないで『うちに五票あるから入れてやる。しっかりやんな』といって励まされたこともあった」。

大平にとっては、桃谷順天館へ就職するとき離れて以来二十年ぶりの四国である。元来が『自立たぬ少年』であったため、小、中学の同窓生の中にも、大平なんちゅう男があつたかの、と言うものがある始末で、後援会の結成も容易ではなかつた。そうした困難をおして、あらゆる縁故が動員された。中心となつたのは、兄大平数光である。数光は、父利吉の死後、親がわりのような立場で一家をひきうけ、正芳の高商、大学時代の学資を援助し、弟のためには、全くわが身といとわなかつた。

## 第10章 政界への道

数光は、正芳と同じく神経は細かいが、マッカーサーという渾名があるほど、気性が激しく、ハッキリと断定的に物を言う性格だつた。この頃は農業をやっていたが、のちに豊浜町議、町議会議長を経て、昭和三十八年豊浜町長となり、以来三期をつとめ、昭和五十一年十二月、弟正芳が栄光の頂点に達するのを見ることなく長逝した。大平正芳は、「生涯を通

して、私のために自らを犠牲にしてよく尽くしてくれた。」と記している（『私の履歴書』）

小学校の同級生四十名は、昭和二十七年二月、豊浜町のよろずや旅館に集まって大いに氣勢をあげた。二十数年ぶりの再会にもかかわらず、（大平）先生はちっとも偉ぶらずに、同級生の名前を覚えていて、肩を叩いてよろしくたのむとこ挨拶して廻ったのには、皆びっくりした。（高橋芳雄、『回想録 追想編』）彼らはみな、自転車で町中を走りまわって大平のために票を集めた。

三豊中学の同窓の力も大きかった。最大の援助は、加藤藤太郎からのものである。当時加藤は、神崎製紙創業間もない頃で苦闘中であつたが、息子のように可愛がっていた大平のために、物心共に大きな援助をあたえた。その実行部隊となつて先頭に立って活躍したのは遠藤福雄営業部長（現社長）であつた。二年後輩で、琴平参宮電鉄で常務をやっていた小野季雄は、「従兄の真鍋忠一から『今度友人の大平が出るから頼むぞ』と依頼があつたが、三豊中学二年先輩の大平という名前は思い出せなかつた。お目にかかつてみると、朴訥で誠実味あふれる自然の応対に心を打たれて、この先輩のためならばと選挙協力を決意した。」（『回想録 追想編』）一年後輩の上森剛（現上森農機社長）も最初から手伝つた人物である。のちに、茨木山治のあとをついで大平の選挙事務長を一貫してつとめたが、大平が「選挙のために選挙をやるのと、政治のために選挙をやるのは違うんじゃない」と言つた言葉が印象的だつたと語っている。

高松高商の同級生赤城猪太郎（富士化学紙工業会長）、太田誠三郎（前出）、神原龜太郎（故人）らはすでに大阪に出て仕事をしていたが、大平の出馬を聞いて、応援体制を敷いた。神原は叶産業という会社を経営していたが、武雄、徳二郎という二人の弟を率い、会社のことなぞそつちのので大平の選挙に没頭した。総選挙が終わつて開票になったとき、大平陣営が力を入れていないと思つていたところから何百という思わぬ票が出てきたが、それは神原兄弟のような人々による知られざる奮戦の戦果だつたという。

ところで、「解散は任期いっぱい」とがんばっていた吉田茂の足許をゆるがす問題が起こつた。それは、この七月で任

期の切れる増田甲子七自由党幹事長の後任人事に、吉田が一年生議員の福永健司を起用しようとしたことに端を発した。自由党議員総会は混乱に陥って收拾がつかず、結局、吉田が譲歩して、林譲治が幹事長を引き受けることで一応の決着を見た。ワシマン吉田の権威が地に落ちはじめた最初の兆しであった。

事実、その後も党内の対立は一層深刻化の度を深め、もはや解散は必至の雲行きとなつて行つた。結局、昭和二十七年八月二十六日に召集された第十回国会の三日目、すなわち二十八日に、吉田は突如憲法七条による「抜打ち解散」を断行した。

総選挙は九月五日に公示され、十月一日投票に決まつた。独立後最初の総選挙である。追放解除組が一斉に立候補し、その数は三百名をはるかに超えた。

選挙の結果、自由党が党内紛争と吉田長期政権への批判から二百四十名と二十四名減少し、改進黨が八十五名、左派社会党が五十四名と躍進し、右派社会党が五十七名とこれも前進、過激すぎる運動のために国民の反発を買つた共産党は前議席の二十二名から一挙に議席ゼロに転落した。

追放解除組の当選者は百三十九名、その中には鳩山一郎、内田信也、緒方竹虎（以上自由党）、重光葵、大麻唯男（以上改進黨）、河上丈太郎、三輪寿壮、河野密（以上右派社会党）、久原房之助、風見章（以上無所属）等の「大物政治家」がおり、その後の政界地図を大きくぬりかえることになる。

大平はこの選挙にあつた自分の態度について、次のように記している。

「選挙といふことは私にとっては始めてのことであるから、布陣の一切は人任せにしてこれに介口することはなるべく避けた。又介口するだけの経験はもとより知識の持ち合わせもなかった。唯私は敵を誹謗するようなことは絶対しないように一同にお願ひしておいた。そしてこれだけのエチケットは最後までどうにか皆んなによつて守つていただけたかと思つている。又私は自分で確信がもてることだけを演説の中で言つたつもりである。人間であるからその言動に多少の誇張や



虚飾のあることは、偽悪者でない限り或程度避けることができないことではあるが、なるべくそのようなことのないように心懸けた。」(『財政つれづれ草』)

大平は、自分の属する自由党の公約については、あまり関心も持たなかった。彼はもっぱら、「インフレーションを抑制して通貨の価値を維持することが、経済発展の基盤であり、道義確立の基礎であり、社会秩序維持の前提である」と演説した。「財政の緊縮整理を断行して、安くつく政府(cheap government)をつくってゆかなければならない」と説いた。山へ入っても、島へ渡っても、同じ所信を繰り返した。

「目先の御利益を誇張的に宣伝して、有権者の歓心を買うようなことはいやしいことであると思った。国民の良識がいつの日か厳正な審判を、かかる言動に下すに違いないと思っていた。民主主義というものは、国民の良識を基調にもっているのだから、もし無責任な煽動が勝利を民衆の中に永遠に打立てるようなことがあるとしたら、私はむしろ私の方から民主主義との絶縁をも敢て辞さない積りだ、という気負った気持をもって、自分自身に言い聞かせていた。」(同前)首相になって最初の選挙の際、財政再建 増税という不人気な政策をあえて国民に率直に訴えようとした大平の態度は、最初の選挙の時にすでに見られたのである。

大平は、イエスの僕会の『野戦』で高松や東京の街頭に立ち、街行く人に呼びかけて以後、不特定多数の人々にむかって自分の信念を訴えたことがなかった。

「敵に対する闘志というものは殆んど湧かなかった。むしろ私は選挙戦というものはどうも人との戦いであるよりも、より多く自分との戦いではなからうかと反省していた。自分に勝ちきることができたら、必ず選挙戦にも勝てるにちがいない。私が選挙に勝つためには、まず自分の内奥に潜む驕慢と怯懦に打ち勝たなければいけないのだ。或は自分にしょつちゆつまとわりついて離れない差恥心と退嬰心を取除き、短慮と投げやりの心を清算しなければならぬのだ。私はこういう心中の敵と絶えず闘争していた。」(同前)

まさに選挙は、大平正芳の心霊修行の場となったのである。

しかし、こうした候補者を戴く選挙陣営の苦勞は、当然のことながら容易ではない。とりわけ、自分でも認めているように、大平は演説が「全く未熟」であった。甥の加地一憲によると、「当時、伯父の演説は、ストロングの発動機みたいだと言われた。これは低速の発動機で、一つパンというところまで時間がかかると、次のパンまで時間がかかるとか」というふうだった。誰しもが「あんな演説でいたい当選するんじゃないか」と不安がった。その弱点を、前に記したような友人たちが手弁当で支えた。むろん大平一族もまた全力を投入した。夫人の志げ子は山も島も町もあらゆるところを駆けめぐった。地元では、志げ子の洗練されたファッションと都会的な容貌が大平のイメージに大きなプラスを加えた。元陸軍少将の従兄の大平秀雄は、図上作戦から実戦まで、つまり参謀から一兵卒の役まで背負い込み、時計を見ては志げ子を次から次へとせき立てた。ムマと富江の姉妹を中心とする炊きだし部隊の苦勞も、ひとかたならぬものがあつた。選挙期間中はほとんど一日に三時間か四時間しか眠らず、一切の賄い方を担当したのである。

そして岳父の鈴木三樹之助は、駒込林町の自宅を担保に入れて、選挙資金を捻出した。

選挙の結果は、参議院からまわってきた自由党鳩山系の加藤常太郎がトップで四万七千三百五十六票、二位が大平で四万三千九十三票、三位が社会党の田万広文で三万六千三百三十七票、次点が自由党の松浦伊平となった。こうして大平は初陣の選挙戦を勝利で飾ることができた。